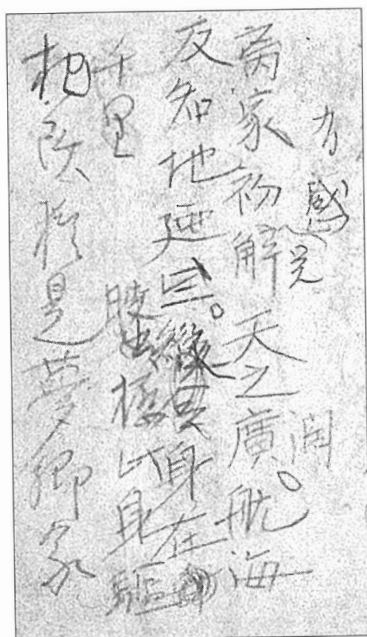


新島 襄の言葉



離家初解天之広 航海反知地廻些
脱櫪此身驅千里 枕頭猶是夢郷家

家を離れて初めて天の広きを解し
海を航して反つて地廻することの些かなるを知る
櫪を脱して此の身千里を駆く
枕頭猶は是れ郷の家を夢みる

(語釈) 地廻……土地を巡り歩くこと

櫪……厩

枕頭……枕元

漢詩解説

水谷 亘 (女子中高 国語科教諭)

『航海日記』慶應元年四月二五日条より。新島は船中、数首の漢詩を書き残しているが、それらの殆どは、鉛筆にて記されており、推敲段階のものであらうと思われる。この詩もその一つで、七言絶句平起式は、初句末が押韻できておらず、また二句目以降は平仄も、二六対の不徹底、冒韻など、未完成であると言わざるを得ない。しかし、そのような不完全さを有して尚、彼の希望と郷愁の念が瑞々しく伝わってくる作品と言つてよからう。

黙想

平松讓二 (女子中高 聖書科教諭)

「籠の中の鳥」という言葉がある。新島は不思議な神の御手に導かれ、函館を飛び出し、アメリカへの航海の最中、これまでの江戸安中藩邸の狭い「籠の中の鳥」的な暮らしを思い起こしていた。家を離れてはじめて知った天の広さは、まさに神が与えてくれた思みであつた。幕藩体制からの解放、そして自由を追い求め、狭い精神的にも不自由な世界から解放された喜びを、感謝をもつて表している。同志社という狭い「籠」の中で育つた中高生や大学生も、いつかは広い社会に飛び出してゆく時が必ず来る。初めて知る世界や想像もしていなかった出来事に遭遇する時もあるだろう。そんな時にこの新島襄の詩を思い出し、さらに大きな夢を抱いて欲しいものだ。